

平成 22 年度 博士学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

子どもは自分の運動能力をどのくらい正確に把握しているのか?

学位の種類: 博士 (作業療法学)

首都大学東京大学院 人間健康科学研究科 人間健康科学専攻作業療法科学域

氏名: 加藤 寿宏

(指導教員名: 山田 孝)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A4 版) に収めること

作業療法士が発達障害児の臨床像の解釈に、身体図式の用語を用いることは多い。しかし、その定義やその根拠となる評価は非常に曖昧な状況であり、臨床に基づく概念の構築や評価方法の開発が望まれている。本研究は 3 歳から 10 歳の定型発達児の身体図式を、前方に跳ぶ (ジャンプする) という運動を用いて、子どもが自分の運動能力をどのくらい正確に把握しているのか、またそれらの能力は年齢によりどのように変化するかを調査した。

対象は 3 歳から 10 歳までの定型発達児 161 名 (男児 83 名、女児 78 名) であった。方法は子どもに前方に跳ぶこと (ジャンプすること) をイメージしてもらい、子どもが跳べるとイメージし示した距離 (イメージ距離) と実際に跳んだ距離 (実際距離) の差を得点にし、自分の運動能力を正確に把握しているか否かを評価した。得点は (イメージ距離 - 実際距離) ÷ 実際距離 × 100 の式で計算した。イメージ距離が実際距離よりも短く、得点がマイナスとなる場合は、自分の能力を過小評価しているとした。反対にイメージ距離が実際距離よりも長く、得点がプラスとなる場合は、自分の能力を過大評価しているとした。得点は絶対値で表し、イメージ距離と実際距離の差が少ない (得点が低い) ほど自己が跳べる距離、すなわち自己の運動能力を正確に把握していると判断した。

結果は月齢と得点の相関を Spearman の順位相関を用いて、また、年齢と得点に有意差があるか否かを Kruskal Wallis 検定および多重比較 (Steel-Dwass 法) を用いて検討した。さらに、年齢ごとに過大評価、過小評価する人数の比率に有意差があるか否かを二項検定により分析した。

月齢と得点は有意な相関を示し ($r = -0.42$ $p < 0.01$)、月齢とともに自分の跳べる距離を正確に把握できるようになった。しかし、年齢間の比較では 3 歳と 4 歳から 10 歳までのすべての年齢には有意な差が認められたが、その他の年齢間では有意な差を認めなかった。また、3 歳から 5 歳の子どもは自己の運動能力を過大評価する比率が有意に多かった (3 歳、4 歳 $p < 0.01$ 、5 歳 $p < 0.05$)。

本研究により、自己の運動能力の把握は 3 歳から 4 歳にかけて急速に正確に把握できること、3 歳から 5 歳の子どもは自分の運動能力を過大評価することが示唆された。